

一、開山 佛光国師無学祖元禅師 (1226～1286)

「一槌に打破す精靈窟、突出す那吒の鉄面皮、
両耳聾の如く口唾の如し、等閑に触著すれば火星飛ぶ」

「乾坤、孤筇ここうを卓つるに地無し、喜得す人空法亦空なるを。
珍重す大元三尺の劍、電光影裏、春風を斬る」

日本国副元帥平時宗請 帖 (円覚に見存す)

時宗、意を宗乘に留むること積んで年序有り。梵苑を建營し、緇流を安止す。但だ時宗、毎に憶う。樹は其の根有り。水は其の源有りと。

是を以つて宋朝の名勝を請じて此の道を助行せんと欲し、詮英二兄を煩わす。

鯨波けんその險阻けんそを憚ること莫く、俊傑を誘引して、本国に帰り来たるを望みと為す而已。不宣。

弘安元年戊寅十二月二十三日

時宗和南

詮藏主禅師

英典座禅師

「莫煩惱」

元亨釈書卷八。弘安四年(1281)の春正月、平帥(北条時宗)来たり謁す。元、筆を采り書して帥に呈して曰く、「莫煩惱」。帥曰く「莫煩惱とは何事ぞ」元曰く、春夏の間、博多擾騒せん。而れども、一風纔に起こつて万艦掃蕩せん。願わくは公、慮りを為さざれ」。果たして海虜百万鎮西に寇す。風浪俄に来たつて一時に破没す。

「法の為人を求めて日本に来たり、珠回り玉転じ荒苔ゆたに委ぬ。

大唐沈却す、孤筇の影、添い得たり、扶桑一掬の灰。」

「諸佛凡夫、同に是れ幻。若し実相を求むれば眼中の埃。

老僧が舍利、天地を包む。空山に向かつて冷灰を撥くこと莫れ。」

「独坐す枯木巖。一嘯すれば風悄々。衆生界未だ空せず。我が心終に飽かず。」

佛光録卷四 此軍及び他軍、戦死と溺水と、萬衆無歸の魂、唯願わくは速かに救拔して、皆苦海を超ゆることを得、法界了に差無く、怨親悉く平等ならんことを

二、第十五世 夢窓国師(1275～1351)

後醍醐天皇再祚建武元年甲戌 師六十歳

秋、皇后登霞す。上師に命じて禁中に留まつて供養せしむること二七日。政を罷めて問法したまう。

九月又師を請じて内禁に於いて衣を受け弟子の礼を執りたまう。

又一日入内するに、師に謂つて曰く、朕深く禅宗を興さんと欲す。師の意何如とするや。奏して曰く、聖言虚しかるべけんや。

上曰く、師を請じて南禅に再住して宗乗を挙揚せよ。

師は辞するに老病を以てす。

上曰く、仏法の隆替は其の人に係る。若し師固辞せば、朕も亦之を如何ともする無くして止まん。

師已むを得ずして詔に応じて再住す。

始め関東亡ぶ時、人皆謂えり。禅苑其れ興らじ。最明寺殿平公は世禅宗を護る。

子孫相継いで其の法を欽奉せり。天下化して之を奉ず。今平氏已に滅べり。惟うに禅宗誰か復た護ることを為んや。是に至つて詔降つて師を召したまう。

禅徒の謹呼の声山林に溢れ、街衢に徹す。

師亦自ら惟えり。斯れ乃ち護法の善神、先仏の記別を忘れざりき。故に然らしむるなりと。是に由つて心倍勇健にして以て法を救うを以て自らの責と為す。大小の禅刹の産業田園幾許というを知らず。

故の如くにして渝らざる者は並是れ師の力にして能く致すのみ。

是に於いて近臣、帝に勸めて禅宗を廃せんと欲して相訾る者多し。

帝、斯の言を以て師に語る。師奏して曰く、陛下、若し叔末が正法に同じからざるを以ての故に今の禅侶の古に及ばざるを責めば、豈独り吾が徒の其の責を得るのみならんや。範金塑泥、刻木彩画の像も亦以て真仏に非ず。黄卷赤軸の文も亦

以て真法に非ざるが故に、之を破毀せば可ならんや。

陛下、若し福田を得んと欲したまわば、只以て剃髮染衣を僧宝と為さば亦足らん。

況んや稠人広衆の中に、禅を修め戒を持つ者有つて、仏祖の恵命を続ぐをや。

是に於いて帝、其の行事を驗みんと欲し、及び宗社の規を見んと欲して、十一月二十八日、百官扈從して山に入りたまう。

半夜に上親しく巡堂したまう。禅侶坐して枯木の如し。上甚だ之を悦びたまう。

次の早、師に命じて衆の爲に入室せしめたまう。又僧堂に入つて僧の午齋に赴くを觀覽し、以為らく礼樂備われりと。斎罷んで師を請じて陞堂説法せしめ、次に

四頭首に命じて乗拂せしめたまう。龍顔大いに飲んで嗟歎すること止まず。此れ

に由つて疑謗斯に蕩げ信心益深まりぬ。車駕已に帰る。

上、僧齋の淡薄なるを憐れんで、十二月初三日を以て特に莊田を賜う。吾が門の

光榮未曾有なり。師上堂祝聖して恩を謝す。罷つて偈を説いて曰く、

公憑は端まきに日辺より臻いたる。乃祖の田園、界畔明かなり。
九穗嘉禾かか、今已に熟したり。恩を荷うことは何んぞ必しも秋成を待たん。
明極禪師韻を次ぎ、山中の宿衲皆和す。繕写して軸と成して裝褙まはして献ず。皇情
大いに悦びたまう。

乱に因つて懷を書す

世途今古幾たびか窮通す。万否千蔵一空に帰す。傀儡棚頭、彼我を論じ、蝸牛角
上、英雄を闘わしむ。須く知るべし、鵲蚌いづば相持する処、終に閻魔の考鞠の中に墮
つることを。馬を華山に放つ、何の日をか待たん。如かじ、轡を覚城の東に頓とまめ
んには。

三、中興 第百八十九世 大用国師誠拙周樗禪師 (1745 ~ 1820)

「老僧二十七歳月船古仏の慈愛を以て初めて円覚に登り、凡そ五十年間正統僧堂
に在つて只仏法を以て人の爲にするを我が任と為す。」

草木にもこころありけり われ見よとけさ咲きそむる庭の白萩

音つれていさめたまひしことのはのふかき恵みをくみて泣けり

つみあるも罪なき人もほとけぞとしればすなはち佛なりけり

四、第二百二世 初代管長 今北洪川老師 (1816 ~ 1892)

禅海一瀾

第七則 浩然

孟軻曰く、我善く吾が浩然の氣を養う。其の氣たるや、至大至剛、直を以て養う
て害わざなうこと無ければ、則ち天地の間に塞みつ。

凡そ天下の儒流、孟軻浩然の章を読み、愬乎として過ぐるならば、眞の儒人に非
ず。山野、疇昔ちゆうせき、此の章に逢いて求道の志、根ざせり。故に後來、常に歎じて
云う、「大教、未だ東来せざる以前に当たりて此の卓見有り。孟軻は謂うべし、
生まれながらにして之を知る者なりと」。

試そみに學者に問う、正文二十九字、但だ一字のみ、生知の全力を用うる処有り、
作麼生か、那一字。